



第43回理事会開催

助成対象に156件を決定

去る10月2日(休), トヨタ財団第43回理事会が東京にて開催された。今回は、助成対象の審議および決定が中心となり、研究助成や国際助成など併せて156件、金額にして4億3,598万円の助成を決定した。

主な内容は、以下のとおり。

●研究助成は64件, 2億730万円

本年度の申請総数は、昨年度比17%増の778件。助成予算は一定のため、選考はそれだけ厳しいものとなった。その中で、独創的な発想により新領域・新分野を開拓しようという意欲的な研究など64件が助成対象に選ばれた。

(P.2~5参照)

●活動記録助成は13件, 2,200万円

今年度から、新たに独立したプログラムとしてスタートした「市民活動の記録の作成および出版に対する助成」については、「記録の作成」で11のグループが、「記録の出版」では2つのグループが助成対象となった。

(P.6参照)

●研究コンクール・本研究助成は8チームに4,000万円

“身近な環境をみつめよう”をテーマとする研究コンクールは今回が4回目となっているが、19の予備研究チームの中から8つのチームが本研究の助成対象として採択された。それぞれに500万円の研究費が助成され、各々今後2ヵ年の研究を開始することとなった。(P.7参照)

おもな内容	
◆研究助成選後評	2
◆研究助成対象一覧	3~5
◆活動記録助成選後評・助成対象一覧	6
◆研究コンクール選後評・助成対象一覧	7
◆国際助成対象一覧	8~10
◆「隣プロ」助成対象一覧	10~11
◆新刊紹介, 他	12

●国際助成は東南アジアを中心に51件, 9,914万円

国際助成対象の決定は、これまで年2回に分けて行われていたが、今年度より、年1回へと変わった。東南アジア諸国などにおける各地の固有文化の保存と振興に関する研究や事業に重点がおかれている。(P.8~10参照)

●「隣人をよく知ろう」プログラムは19件, 6,604万円

本プログラムの助成対象の決定は、従来3月理事会においてなされていたが、今年度からは10月理事会において行われることとなった。今回は、(1)翻訳出版促進助成としては、日本向け9件、東南アジア向け4件、東南アジア相互間4件が、また、(2)東南アジア諸語辞書編纂出版助成では、2件が助成対象となった。(P.10~11参照)

●その他

民間助成活動促進助成の対象に1件150万円が決定。

以上にこれまでの決定分を含めると、今年度の助成対象は、172件、4億6,808万円となる。また、昭和50年度からの助成金累計額は、約52億4,600万円となった。

第12回助成金贈呈式

10月15日(休)午後1時半より、東京都新宿区の京王プラザホテルにおいて、昭和61年度のトヨタ財団助成金贈呈式が行われた。助成を受けられた方々や財団関係者など多数のご出席をいただいた。豊田英二理事長の挨拶、各選考委員長による選考経過の報告の後、理事長より代表者に助成金贈呈書が手渡された。また、来賓として、総理府・内閣総理大臣官房管理室長の橋本哲曙氏よりご挨拶をいただき、午後2時50分に閉会となった。





研究助成の選考を終えて

研究助成選考委員長
加藤 一郎

本年度の申請総数は、778件にのぼった。昨年度（特定課題を除く）は666件であったから、17%の増ということになる。助成予算は昨年度と同様であるから、選考はそれだけ厳しくなったわけである。

結果として、合計64件が採択となった。助成総額は2億730万円で、予算より730万円超過した。これら64件の推薦理由は、別途に各委員の方々に分担して執筆いただいているので省略するが、選考の方針としては、ユニークな発想で新領域・新分野を開拓しようという意欲的なもので、民間財団ならではの特徴ある研究を選ぶように務めたつもりである。

以下、簡単に各研究種別ごとの特徴を述べることにしたい。

●個人奨励研究（第Ⅰ種）について

若手の試行的・独創的な研究の奨励を目的とするこの研究では、325件の申請に対し、22件しか採択出来なかった（採択率6.7%）。もちろんこのほかに多くの興味ある申請があったわけだが、結局、選考の過程で残念ながら不採択ということになった。

採択となったもの22件中5件は、外国の研究者によるものであり、その国籍はネパール、オーストラリア、中国、スリランカ、東ドイツといった具合に大変バラエティに富んでいる。これらの研究はいずれも、純粋に日本文化を究めようと

いうよりは、国際社会の中での日本の役割や係わりを、自国あるいは自文化との関係からあきらかにしようとしている点に特徴がある。

22件中17件は、日本の研究者によるものであるが、そのほとんどが国内在住者で、海外在住者による研究が少なかった（2件）。個人奨励といっても一般の奨学金とは異なり、やはり研究それ自体が魅力的で説得力がなければ採択にはならない。奨学金に準ずるつもりで申し込まれた大学院生の申請については、かなり厳しい結果とならざるを得なかった。

なお、今年度は、2件が継続助成の対象となった。研究者として一層の成長を遂げられることを期待したい。

●予備的研究（第Ⅱ種）について

今後の学際的・職際的・国際的な総合研究を目指すグループの予備調査に助成するこの研究では、423件の申請に対し、30件が採択となった（採択率7.1%）。

ここでも国際的なチームが多く、30件中17件という過半数が外国人の参加する研究である。このうち5件は、代表者が外国の研究者であり、その国籍は、韓国、中国、インドネシア、アメリカ、インドと広がっている。テーマ的にも、環境問題から文化や健康の問題に至るまで幅広く、それぞれの立場を生かした野心的なものである。

国内の研究者だけによる共同研究では、広い意味での福祉・教育に関する職際型の研究が多かった。この種の研究では、現場の実践に結びつく成果が得られることを重視した。

なお、30件中4件は、継続研究であり、内2件は昨年度の個人奨励研究から発展したもので、2件は再び予備研究を行うものである（後者のうちの1件は、第Ⅲ種で申請のあったものを第Ⅱ種として採択したもの）。本年度からⅠ・Ⅱ種研究とも継続申請を可能としたため、様々な展開の可能性がでてきたことは好ましい傾向と言えよう。

●総合研究（第Ⅲ種）について

これまでの予備研究（第Ⅱ種）の展開あるいは総合研究（第Ⅲ種）の継続として行うこの研究では、30件の申請に対して12件が採択となった（採択率40%）。採択率から言えばⅠ・Ⅱ種に較べてはるかに高いが、すでに難関を突破したのからの選考であることを考えれば、かなり厳しい結果と言えらる。選考に当たっては、申請書だけでなく、すでに提出されたこれまでの研究についての報告書が重要な判断材料となった。

ここでも12件中8件は外国人の参加する国際共同研究となっており、内2件はイギリス、オーストリアの研究者が代表者である。これらのほとんどは、海外をフィールドとして実施する研究である。

第Ⅲ種研究12件のうち8件は昨年度からの継続であり、3件は一昨年度から一年おいての継続である。このように財団の研究助成では色々な可能性がある中で、今回不採択となった研究チームも来年度以降、十分な準備を踏まえて再申請されることを期待したい。

なお、新規の一件は、過去3年にわたりフォーラム助成によって検討し、企画・提案された戦後日本の科学技術に関する特別研究である。初めてのケースということでこの委員会でも審査したが、今後は独立の計画研究として考えた方がよいのかもしれない。

◇ ◇ ◇

トヨタ財団の研究助成は、国籍や所属等の一切の資格を問わず、しかも助成金使途もあまり制限がないため、さまざまな研究者の自由な交流が可能である。このようなことから、毎年、国内外から多くの申請が寄せられるのであるが、予算枠もあり、ほんの一部の方々にしか応じられない。選考する側としては、大変つらい思いをするわけであるが、不採択となった方々もどうかご了解いただきたい。

なお、猛暑のなか鋭意選考の労をおとりいただいた11名の委員の方々には改めて感謝申し上げたい。

贈呈式にて選後評を述べる加藤委員長





1986年度研究助成対象一覧

第I種研究（個人奨励研究）〔22件；3,630万円〕

No.	研究題目	研究者名	研究者所属	助成金額 (万円)
1	第三国定住後のベトナム難民の実態・動向に関する調査研究(継-2)	小 泉 康 一	(勸) 日本タイ協会	180
2	中米における僻地医療の事例研究 — プライマリーヘルスケアの実践とその受容について —	池 田 光 穂	ホンジュラス国・保健省	200
3	九州及びその離島におけるシャーマンの職能者の研究	福 島 邦 夫	長崎大学教養部	130
4	日本の南アジア政策に関する研究 — 日本ネパール関係を中心に —	シディ・ラクスマ・ ヴァイデヤ	トリプワウン大学ネパール アジア研究センター	190
5	ベンガル・タントリズム（バウル・フォキル派）における修行者の社会背景とその修行体系・修行歌の分析	大 西 正 幸	外務省語学研修所	190
6	小人症児・者の社会化過程に関する実証的研究	渡 辺 裕 子	(勸) 東京都神経科学総合研 究所	50
7	マレーシアの日系合弁企業における労使関係：経営スタイルと組織・生産技術の国際移転に関する事例研究	ウェンディ・アーン・スミス	マラヤ大学大学院人類学科	180
8	爬虫類における温度性決定の進化的研究とその理論の野生動物保護への応用	徳 永 章 二	九州大学理学部	190
9	沖縄のサンゴ礁における炭酸カルシウムの生産と大気からの二酸化炭素の固定に関する研究	大 出 茂	琉球大学理学部	190
10	ニューヨークの韓国人学校・日本人学校 — 海外子女教育の比較的考察 —	國 枝 マ リ	津田塾大学	170
11	辛亥革命をめぐる日本財界と大陸浪人 — その理念と行動、とくに中央銀行設立構想を中心として —	李 廷 江	東京大学大学院総合文化研 究科	190
12	日本における統合教育の現状と今後の展開に対応できる学校建築のあり方	野 村 みどり	東京都立医療技術短期大学	180
13	洗剤は魚類の分布を変えるか — 重信川水系における野外実験調査と忌避試験研究 —	日 高 秀 夫	愛媛大学農学部	200
14	インドネシア残留日本兵の記録と社会史的研究	秋 野 晃 司	国際基督教大学	180
15	北上山地山村におけるヤマ資源利用のストラテジーの変容と近代化の構造 — アカバネ病発生を手がかりとして —	岡 惠 介	岩泉町教育委員会	100
16	スリランカ村落における農産物加工の展開と新しい流通システム	R.M. ピヤデーサ	龍谷大学大学院経済学研究 科	180
17	「日本の宗教と平和 — 思想と活動 — 」その21世紀世界協同体の思想への貢献	ノーバート・ フランケンシュタイン	(フリー)	180
18	近代化と宗数の救済：アレーシア、ムマリ事件にみるアイデンティティの形成	中 澤 政 樹	筑波大学大学院地域研究科	160
19	西マレーシア北西部稲作農村における稲作技術の変化とそれに伴う環境の変容についての研究 — マレー農村における長期住み込み調査 — (継-2)	板 垣 明 美	筑波大学大学院歴史・人類 学研究科	150
20	思春期やせ症に対するシミュレーションを用いた家族療法	石 川 元	浜松医科大学	100
21	今井町にみる『講』組織の現代的役割に関する研究	阪 本 日出雄	(他) 奈良まちづくりセンター	140
22	アーミッシュの家庭と学校 — 現代アメリカの科学技術文明と調和した17世紀の暮らし —	松 沢 哲 郎	京都大学霊長類研究所	200



第II種研究（予備的研究）〔30件；7,800万円〕

No.	研究題目	代表者名	代表者所属	助成金額 (万円)
23	韓国及び在日韓国人の疾病類型と死因の変遷様相に関する研究 — 死因及び疾病類型の変遷要因の生態学的研究 —	金正根 他3名	ソウル大学保健大学院	280
24	ボゴール博物館と連帯して、インドネシアの自然史研究を推進する計画	吉井良三 他6名	ボゴールと連帯する会	300
25	フィリピン、ネグロス島における経済自立と経済協力の展望	西川潤 他6名	日本ネグロス・キャンペーン委員会	300
26	聴覚障害者の教育に最適な字幕合成の在り方と字幕合成装置の改良に関する研究	小畑修一 他5名	筑波大学学校教育部	260
27	妊娠・出産・育児に伴う母子精神衛生に関する学際的研究	北村俊則 他4名	国立精神衛生研究所	180
28	未来通信メディア(ニュートリノ通信、重力波通信、超能力通信等)に関する調査研究	桜井邦朋 他3名	神奈川大学工学部	200
29	ストーマケアに関する研究 — 人工肛門・人工膀胱保有者の日常生活上多発するスキントラブルの対策を考える —	高屋通子 他3名	東京都立府中病院	170
30	満族を中心とする中国東北部の文化複合 — 満族文化の周辺諸民族に及ぼした影響 —	金連紘 他5名	中部大学国際関係学部	300
31	社会福祉施設における中学・高校生の福祉教育に関する研究(福祉教育の実践事例の検討と評価)	山村三郎 他5名	天竜厚生会研修センター	280
32	熱帯植物の農業活性物質の研究 — インドネシアを中心として —	山本出 他12名	東京農業大学総合研究所	140
33	ネパールに於ける視覚障害児教育の方法論に関する実践的研究	五十嵐信敬 他6名	広島大学教育学部	290
34	タイ、チェンマイの地域保健事業に関する適正技術とシステムの開発	竹中静廣 他6名	琉球大学医学部	280
35	留学生の主婦からみた日本社会への適応過程に関する研究	アリーナ・グナリヤ 他6名	バジャジャラン大学心理学部	200
36	前近代の日本における職能民の社会と歴史 — 「職人歌合」「職人尽絵」「洛中洛外図」等の資料学的研究を通じて —	網野善彦 他4名	神奈川大学短期大学部	270
37	小児のメンタルヘルスに関する疫学的調査 — その予備的研究 —	森田博 他5名	東京大学医学部	300
38	母国語の拘束と国際相互理解 — アラブ人の子備調査 — (継-2)	黒田安昌 他2名	ハワイ大学政治学部	240
39	子どもの人間関係のとり結び方に関する予備的研究 — DENの人間関係のDENの実態	万羽晴夫 他9名	熊本大学教育学部	190
40	タイ国における蛋白質・エネルギー栄養障害児の内分泌学的研究	山王義一 他4名	武庫川女子大学家政学部	290
41	健やかな長寿社会実現のための栄養と運動要因に関する国際比較研究	家森幸男 他9名	島根医科大学医学部	300
42	東西技術移転の法的諸問題に関する予備的研究	小田博 他5名	東京大学法学部	270
43	アメリカの貿易法制と貿易政策 — 日米経済摩擦の法律的一断面 —	加藤雅信 他2名	名古屋大学法学部	270
44	インド・ボパール市におけるガス中毒事件の後遺症に関する印・日共同研究	D.K. ベルサーレ 他5名	ボパール大学生命科学部	290
45	人間関係の出発点としての母親のマザリーズと乳児の発声行動の関連 — 比較文化的検討へ向けての予備的研究 — (継-2)	志村洋子 他7名	埼玉大学教育学部	260
46	鳥類における重金属類の生体影響と非捕殺的モニタリング(継-2)	本田克久 他4名	愛媛大学農学部	280



No.	研究題目	代表者名	代表者所属	助成金額 (万円)
47	高密度観測網による都市化地域自然環境の研究～土地破覆変動に伴う体感気象を含めて～	土屋 清 他10名	千葉大学映像隔測研究センター	280
48	事業評価の社会的基準 — 市民的基礎の確立をめざして —	尾上 久雄 他7名	大阪産業大学経済学部	300
49	新しいまちづくり運動における社会ビジョンとその実現過程	久住 剛 他13名	神奈川県自治総合研究センター	240
50	元水銀鉱山労働者・家族の疾病史と生活史に関する労働衛生学的、社会学的研究	土井 陸雄 他7名	旭川医科大学	270
51	日本・ベトナム初期稲作立地比較論に関する国際共同研究	桜井 由躬雄 他8名	京都大学東南アジア研究センター	270
52	北海道沿岸に生息するアザラン類の保護管理に関する研究およびその自然教育への応用(継-2)	中村 悟 他21名	帯広市立おびひろ動物園	300

第III種研究（総合研究）〔12件；9,300万円〕

53	二重文化的状況下の子どもの社会化過程の実証的研究(継-2)	箕浦 康子 他6名	岡山大学文学部	400 (2年)
54	難聴幼児の言語・知能を育て、健聴児と一緒に生活できる基盤をつくる(継-2)	中島 誠 他12名	京都大学教養部	230
55	東アフリカの作物害虫に対する主要作物の抵抗性に関する国際共同研究(継-2)	日高 敏隆 他7名	日本ICIPE協会	860
56	新世代住民に対する新しい保健医療計画の確立 — 日米両国における比較研究に基づいて — (継-2)	稲田 紘 他9名	筑波大学社会医学系	960 (2年)
57	国際プロジェクトチームによる日本美術史研究のための基礎資料整備計画(継-2)	佐々木 丞平 他13名	京都大学文学部	410
58	ASEAN諸国の開発過程と日本の係わり方に関する研究 — タイ・インドネシアにおける日本のマネジメントの受容過程を中心に — (継-2)	山下 彰一 他12名	広島大学経済学部	1,000 (2年)
59	日欧ビジネスマンの文化摩擦に関する研究 — 国際間の誤解解消のために — (継-2)	イレーネ・M. ヤング 他10名	筑波大学(外国人研究員)	600 (2年)
60	ヨーロッパにおけるアイヌ関係コレクションの調査研究(継-2)	ヨーゼフ・クライナー 他3名	ボン大学日本文化研究所	620 (2年)
61	中国の乾燥地における沙漠化の機構解明と動態解析 — 毛烏素沙漠緑化と農業開発に関する基礎的研究 — (継-2)	松田 昭美 他21名	鳥取大学農学部	1,700 (2年)
62	日米戦時交換船・戦後帰還船の実態究明と帰国者に関する資料収集 — 日系アメリカ人の歴史の視点から(継-2)	村川 庸子 他1名	津田塾大学国際関係研究所	400 (2年)
63	航空におけるINCIDENT REPORT SYSTEMに関する総合的研究 — 航空交通管制業務をめぐって — (継-3)	宮城 雅子 他9名	航空法調査研究会	1,170 (2年)
64	戦後科学技術の社会史に関する総合的研究〔特別研究〕	中山 茂 他11名	科学と社会フォーラム	950

1986年度研究助成合計

64 件

20,730

注 { 研究題目末尾の継-2(3)は、継続2(3)年目を示す。
助成金額下の()は、助成期間を示す。無記入は1年間。



活動記録助成の選考を終えて

活動記録助成選考委員長

縫田 暉子

「新しい人間社会を目指した市民活動の記録の作成」をテーマに、昨年度、一昨年度の2ヶ年にわたり実施してきた研究助成・特定課題については、今年度より『活動記録助成』と名称を変え、独立したプログラムとしてスタートすることとなりました。

内容的には、従来の「記録の作成」に対する助成を主体としておりますが、他に、これまでの助成により完成した「記録の出版」に対する助成も行おうというのがその趣旨です。

新しいプログラムの発足とともに、選考委員会のメンバーも何人かの交替が行われました。選考委員長として改めて責任の重さを感じたと同時に、他の委員の皆様のご熱心なご協力により、無事に選考の任を果すことが出来たことを感謝致しております。

さて、今年度の「記録の作成」に対する申請件数は、これまで（昨年度46件、一昨年度44件）に比べると少なくなりました。これをもって、「記録を作成するだけの力のあるグループはもうそろそろなくなってきつつあるのではないだろうか？」と即断するわけではありませんが、今後のこのプログラムに対する取組み方について参考とすべき数値が与えられた

ような気がしております。いずれにしても、日々の活動をしながらおかつ、その記録をまとめていこうとする熱意には並々ならぬものがあり、それは一つ一つの申請書からもかなり読取ることが出来ました。申請の内訳を事務局でまとめられた資料によれば次のようになります。

①記録の対象となるグループの所在地

東京9件、愛知5件、大阪・兵庫各4件、茨城・長野各2件、他は1件ないし0となっており、東京（過去2回とも20件前後）が今回はかなり減り、その代り、これまで申請のなかった地域からの申請が増えました。

②活動分野

医療・健康に関するもの8件、障害者福祉6件、環境保護・街づくり・老人ケア・国際交流各4件、教育・その他各3件、生活の見直し2件、文化活動・海外援助・複合各1件となっております。医療・健康および国際交流に関する申請が増えたことが今回の特徴でしょう。

③グループの形態

法人化されてない任意のグループが37件と今年も多数を占めております。（他は財団法人3件、株式会社1件）

④活動歴

5年未満21件、5年以上10年未満10件、10年以上20年未満8件、20年以上2件となっており、今年は5年未満のグループからの申請がこれまでに比べかなり多くなったのが特に目につきました。申請グループの熱意もよく理解出来ますが、活

動歴が5年未満のグループは、今現在の活動を軌動に乗せることで精一杯であり、なかなか記録を作成するだけの余裕がないのが実情ではないかと思われるだけに、この辺が選考の際に大いに議論となった点でもありました。

そして選考委員会で、活動そのものが広さと深さを有しており、それを記録することにより、他の類似の活動に大きなインパクトを与え得ること、および申請書に書かれた記録の企画自体もしっかりしていることなどが主な視点となり、大変熱のこもった審議がなされました。こうした過程で、活動歴の短いものや活動内容に広がりやの欠けるものなどは脱落することとなり、結果として下記の11のグループが助成対象候補となりました。

今回の「記録の作成」につき、惜しくも採択とならなかったグループにつきましては、今後、十分な活動体験の蓄積および活動内容の広がりを追求されたうえで、いずれ再度申請されることを希望致しております。

◇ ◇ ◇

なお、「記録の出版」については、本年度分は今年一杯申請を受けつけておりますが、今回は申請のあった2つのグループが助成対象となりました。財団としては、これまでの助成により完成した記録については、出来るだけすべてのものを出版したい意向であると同っておりますので、記録を完成されたグループは積極的に申請されることをお勧め致します。

活動記録助成対象一覧

No.	テ	マ	代	共	代	助
			表	同	表	成
			者	者	者	金
			名	数	所	額
					属	(円)
1	明るい老後を考える会の活動に関する記録の作成		竹内とき江	他13名	明るい老後を考える会	1,800,000
2	ドングリの会の活動に関する記録の作成		稲本 正	他8名	ドングリの会	1,800,000
3	薬害・医療被害情報センターの活動に関する記録の作成		泉 公一	他7名	薬害・医療被害情報センター	2,000,000
4	米川支流環境づくり協議会の活動に関する記録の作成		片野 喜代士	他17名	米川支流環境づくり協議会	1,600,000
5	財団法人水俣病センター相思社の活動に関する記録の作成		吉 永利夫	他7名	財 水俣病センター相思社	2,000,000
6	テント村キャンプ実行委員会の活動に関する記録の作成		上 野 允士	他5名	テント村キャンプ実行委員会	1,700,000
7	各地のボラン広場の活動に関する記録の作成		狩 野 強	他12名	全国ボラン広場事務局	1,900,000
8	FMひがしむらやまの活動に関する記録の作成		矢 野 穂積	他9名	FMひがしむらやま	1,800,000
9	名古屋手をつなぐ親の会・福祉青年教室の活動に関する記録の作成		加 藤 孝正	他10名	名古屋手をつなぐ親の会	1,800,000
10	寝屋川市民たすけあいの会の活動に関する記録の作成		上野谷 加代子	他14名	寝屋川市民たすけあいの会	1,800,000
11	財団法人日本シルバーボランティアズの活動に関する記録の作成		岡 田 啓一	他10名	財 日本シルバーボランティアズ	1,800,000
	合	計	11 件			20,000,000



第4回研究コンクール

本研究助成の選考を終えて

研究コンクール選考委員長
浅田 孝

第4回研究コンクールも、本研究助成対象に8件を選出することで、足かけ4年に及ぶ実施期間の前半のひとつの山を越えることとなった。この8件は全国140件の応募の中から厳しい選考と、5ヶ月にわたる予備研究を経て選び出されたものであり、これから2年後の優秀賞・最優秀賞に向けてさらにお互いにしのぎを削っていただくこととなる。

●選考経過

これまでの経過を概観すると、全国から寄せられた140件の応募案件のうち、予備研究助成対象となった20チームが活動を開始したのが4月初めであった。6月から8月にかけては、9人の選考委員がそれぞれ分担して、全国20ヶ所の各チームのフィールドを訪ね現地インタビューを行った。

8月30・31日の両日には予備研究のしめくりとして、東京の国際文化会館にて、この先2ヶ年の研究実施計画の報告会が行われ、それと前後して2度の選考委員会が開かれた。報告会の時点で1チームが辞退されたため、選考の対象は19チームとなった。

第1次選考は、報告会后に、研究計画に対する各委員の評価結果をもとに行わ

れたが、全員一致で本研究の助成対象に相応しいとされたものは2件に限られ、その他はほとんど賛否両論に評価がわかれた。この日の第1次選考では採択候補グループ、保留グループ、不採択候補グループの3群を概略区分するにとどめ、各チームからの予備研究報告書の提出を待って第2次選考を行うこととなった。

9月12日、研究報告書をふまえてさらに第2次選考が行われた。その際、選考基準に照せば不採択とならざるを得ないが研究の継続は望まれるというものもあるので選外佳作のようなものを設けてはどうかという議論も行われたが、結局本研究一本にしぼることとなり、厳しい議論のすえ件数も8件となった。

●助成対象の特徴

助成対象となった8件の地理的分布は、北は紋別から南は石垣島ということでこれまでのコンクールの中では一番巾が広がった。その中で東京に3件が集まり、しかも上野と神田というきわめて近い地域に2件が並んだことが興味深い。

テーマ別では、石垣と行徳でそれぞれ野鳥を対象とし、他に屋久島の植物、紋別の流水などの4件が自然を対象としたものであるが、それらには、人間の生活とのかかわりという観点が強く意識されている。残りの4件の上野、神田、八王子、京都はいずれも広い意味でのアメニティーがテーマともいえるが、それぞれの切り口にはこれまでにない新鮮さを感じられた。

●常に原点を忘れずに

今回の研究計画の報告会は、各チームのプレゼンテーションにずいぶんと努力のあとが感じられた。しかし反面、プレゼンテーションより以前にもっと本質的な筋道について十分な検討と整理が必要なのではないかと思われるものも多かった。

このコンクールの趣旨は、わたしたちひとりひとりの身近な環境に対する様々な「思い」を出発点に、それを大事に育てながらみんなで研究に取り組んでみようということである。その際重要なのは、個々の思いが個人を越えたチームとしての意志へとより合さり、社会へ働きかける力にまで高まっていかねばならないということだろう。十分なディスカッションを通じて、研究でできることは何か、研究の先にあるものは何なのかについて共通の理解を深め、チームとしての明確な筋道を示していただきたいかった。

厳しいようではあるが、採択となったチームの中にも、まだこの点不安の残るものもあった。常にこの原点に立ちかえって問題を整理しなおしながら、今後の研究を進めていただきたい。

また残念ながら選にもれたチームも、選考委員での評価が分かれた事実からも察せられる通り、採否はあくまで当コンクールの趣旨との関係で相対的に決ったもので、それぞれの活動はそれぞれに大きな意義があるものと思う。これからもぜひ息長く活動を続けていっていただきたいと願う次第である。

第4回研究コンクール・本研究助成対象一覧

No.	テ マ	(対象都道府県)	代 表 者 名	(共同者数)	団 体 名	助成金額(円)
1	植物の宝庫といわれる屋久島において人は植物たちとどのようにつきあってきたか	(鹿児島)	真 辺 末 彦	(他10名)	おいわねっか屋久島	5,000,000
2	オホーツク海沿岸の流水と人間生活のかかわりに関する研究	(北海道)	山 原 良 一	(他14名)	オホーツク流水研究会	5,000,000
3	上野・谷中・根津・千駄木の「親しまれる環境」の調査研究	(東京)	浦 井 正 明	(他12名)	江戸のある町上野・谷根千研究会	5,000,000
4	神田のサウンドスケープ ― その歴史と現状	(東京)	鳥 越 けい子	(他50名)	神田サウンドスケープ研究会	5,000,000
5	石垣島アンパルの研究 ― 野鳥の生息状況調査とその環境調査及び環境教育にかかわる研究 ―	(沖縄)	島 袋 憲 一	(他29名)	アンパル野鳥研究会	5,000,000
6	よみがえれ新浜 ― 水質浄化と水鳥の誘致	(千葉)	東 良 一	(他19名)	行徳野鳥観察舎友の会	5,000,000
7	重度身体障害者の「食環境」に関する研究 ― 京都における調査を中核にして ―	(京都)	谷 口 明 広	(他13名)	しりたいたクラブ	5,000,000
8	都市環境としての酪農・農村集落存続の試み ― 多摩ニュータウン19住区及び隣接地に於る都市と農村の共存を目指して ―	(東京)	鈴 木 昇	(他28名)	八王子市寺沢地区・酪農ヴィレッジ(村)研究会	5,000,000
合 計			8 件			40,000,000



1986年度国際助成対象一覧

インドネシア [15件 ; 2,511万円]

No.	プロジェクト名	代表者名	代表者所属	助成金額 (万円)
1	西ジャワにおける伝統的民俗造形芸術：伝統的包装	スティアワン S. 他1名	バンドゥン工科大学美術学部	56
2	ブル島の孤立した民族ワカハロ族とその世界	ム ス H. 他2名	バティムラ大学教員養成学部	143
3	アチェの封建領主ウレーパランの歴史研究	ルスティ S.	ジャクアラ大学教員養成学部	54
4	北アチェの工業開発にともなう周辺社会の文化変容(継-2)	グヤン D. 他12名	ジャクアラ大学社会科学調査訓練センター	491
5	スラウェシ南部の沿岸地域の社会	ムフリス 他10名	ハサヌディン大学社会科学調査訓練センター	490
6	都市文化の勃興：1900年から1915年のスラカルタ	クントウィジョヨ	ガジャマダ大学文学部歴史学科	136
7	東南アジアのイスラム(継-2)	タウフィク A. 他1名	国立文化研究所	115
8	ミナンカバウ社会における近代的官僚制と伝統的権威	イムラン M. 他5名	ミナンカバウ文化研究財団	84
9	若い科学者のフォーラム：インドネシアの現実に適用可能な社会科学をめざして	ウィラディ B.	API財団	186
10	19世紀ジャワの強制栽培制度に対する農村の反応	ジョコ S.	ガジャマダ大学文学部歴史学科	135
11	公文書館のアクセスと利用に関するコロキウム	スマルティニ	国立公文書館	150
12	ミナンカバウ語に特有の語彙、連語、表現の研究(継-2)	ハイディル A. 他3名	ミナンカバウ文化研究財団	61
13	複合社会における社会的統合を促進する教育・社会施設の空間的配置：メダン市の研究(継-2)	ウスマン P. 他5名	メダン教育大学人口教育・環境研究センター	157
14	バリの歴史関係員葉文獻の翻字、翻訳(継-2)	A.A.G.P. アグン	ウダヤナ大学文学部歴史学科	78
15	アチェ起源のマレー古文書のインヴェントリー(継-2)	ザカリヤ A. 他4名	国立アチェ博物館	175

ネパール [5件 ; 1,963万円]

16	ネパール諸語の古文書の保存と記録(継-3)	S.L. シュレスタ 他6名	チュワサ・バサ	512
17	中世ネパールの碑文研究	D. ヴァジラチャルヤ 他4名	トリブヴァン大学ネパール・アジア研究所	832
18	古典ネパール語辞書編纂(継-2)	P.B. カンサカール 他6名	ネパール語辞書委員会	198
19	ネパール古文書の複製・翻字・解説の刊行(継-3)	K.P. マッラ 他4名	トリブヴァン大学人文・社会科学研究所	290
20	カトマンズ盆地の美術品の写真インヴェントリー(継-2)	L.S. バンデル 他12名	ネパール王立アカデミー	131



フィリピン [19件 ; 3,200万円]

No.	プロジェクト名	代表者名	代表者所属	助成金額 (万円)
21	東ヴィサヤ地方のタンバラン (民間治療師) に関する記述研究	R. C. テイストン 他 5 名	ディウフェイン・ワード大学 行動科学科	93
22	古典マラナオ語の語彙および句に関する辞書	B. アル・マカラヤ 他 1 名	ミンダナオ州立大学研究セ ンター	68
23	『フィリピン民間信仰と慣習に関する事典』の増補・改訂版の出版	F. R. デメトリオ 他 4 名	セイウィヤー大学フィリ ピン研究学科	441
24	フィリピン社会史：1663年—1765年	M. C. ゲレロ	フィリピン大学社会科学・ 哲学学部歴史学科	322
25	フィリピン諸語辞書	E. コンスタンティーノ 他 5 名	フィリピン大学文理学部言 語学科	444
26	フィリピンのマドラサ学校(継-2)	M. ホランシン 他 3 名	ミンダナオ州立大学分校イ リガン工科大学	276
27	異文化間交流的視点から見たダバオの3民族グループ(継-2)	H. K. グロリア 他 3 名	アテネオ・デ・ダバオ大学 社会科学科	81
28	マラナオ族の叙事詩『グランガン』の出版(継-2)	M. D. コロネル 他 8 名	ミンダナオ州立大学研究セ ンター	374
29	北部フィリピン、パンガシナン州の政治・社会経済・文化史：1901 年—1986年(継-2)	R. M. コルテス	フィリピン大学社会科学・ 哲学学部歴史学科	66
30	フィリピン農村社会における医療信仰とその選択	M. P. ティアス	デ・ラ・サル大学行動科学 科	142
31	イロコス地方の経済・社会史：1900年—1935年	D. B. アピラド 他 3 名	フィリピン大学社会科学・ 哲学学部歴史学科	166
32	アメリカ支配から現在に至るまでのネグロス・オリエンタル州の歴史	C. A. ロドリゲス 他 1 名	シリマン大学歴史・政治学 科	143
33	ワライの伝承：レイテ地域の地方史と社会変化(継-2)	J. B. ボロ 他 5 名	(フリー)	97
34	セブアノ文学選集：1801年—1985年	R. B. モハレス 他 3 名	サン・カルロス大学セブア ノ研究センター	87
35	フィリピン国立公文書館のスペイン語古文書インヴェントリー作成 (継-2)	R. A. コンセプション 他 3 名	国立公文書館	72
36	フィリピン演劇の歴史とアンソロジー(継-2)	N. G. ティオンソン 他 3 名	フィリピン大学文理学部フ ィリピン語文学科	77
37	フィリピン社会の連続性と変化——南コタバトの経験：1913年—1986年	D. M. ノン 他 3 名	ミンダナオ州立大学ジェネ ラル・サントス校社会科学科	57
38	ネグロス・オキシデンタル州の社会・文化・経済史：1850年—1985年 (継-2)	V. L. ゴンザガ 他 3 名	ラ・サル大学社会調査セン ター	128
39	セブの植民地教会の歴史的な研究——その建築および美術的特徴： 1590年—1890年	C. S. タマヨ 他 2 名	サン・カルロス大学セブア ノ研究センター	166

タイ [9件 ; 1,976万円]

40	タイにおける伝統建築研究の成果出版(継-6)	アヌウィット C. 他 2 名	シンラバコン大学	145
41	東北タイの民衆の知恵とアイデンティティの模索	セリ P. 他 1 名	タマサート大学教養学部哲 学科	161
42	グエン時代ヴェトナム社会・経済史の予備的研究	ボンベン H.	シンラバコン大学文学部歴 史学科	533
43	タイ南部国境近県のタイモスレム民家建築調査：成果の出版(継-4)	ケイト R. 他 7 名	ソクラ王子大学パタ二校 人文・社会科学学部	246



No.	プロジェクト名	代表者名	代表者所属	助成金額 (万円)
44	北タイの文化に関する民族学・歴史学研究：儀礼と信仰のインヴェントリー作成(継-2)	アナン G. 他4名	チェンマイ大学芸術文化振興センター	331
45	貝葉文献に基づく北タイ古語辞書編纂(継-3)	アルンラット W. 他10名	チェンマイ教育大学ランナタイ民俗研究センター	80
46	ランナタイ研究情報プロジェクト(継-2)	チャヤン V. 他5名	チェンマイ大学芸術文化振興センター	242
47	北タイ、ビルマ・シャン州、インド・アッサム州のタイ語族の文化・社会比較の予備的研究	シャラチャイ R. 他6名	チェンマイ大学社会科学部 社会学・人類学科	101
48	『ビルマのデザイン』の編集と出版(継-2)	チャーク S. 他3名	シンラパコン大学装飾芸術学部	137

ヴェトナム〔3件；264万円〕

49	『大地と水の誕生』の神話の編纂、翻訳、出版	D.V. ルン 他1名	文学研究所	79
50	ヴェトナムにおける仏教の歴史	N.T. トウ 他2名	哲学研究所	106
51	ダム・サン民話の編纂、翻訳、出版	N.V. ホアン 他1名	文学研究所	79

1986年度国際助成合計

51 件

9,914

注：プロジェクト名末尾の継-2(3) (4) (6) は、継続2(3) (4) (6) 年目を示す。

1986年度『隣人をよく知ろう』プログラム助成対象一覧

「翻訳出版促進助成」・日本向け〔9件；1,372万円〕

No.	日本語仮題名 (国名)	訳者名	出版者名	助成金額 (万円)
1	我が来しかた：自我形成における教育と社会化 (インドネシア)	高取 茂	井村文化事業社	140
2	近代化と宗教 — シンガポールにおける華人、マレー人、インド人の儀礼変容 (シンガポール)	設楽 靖子	井村文化事業社	100
3	タイ農村経済史 (タイ)	野中 耕一 末 広 昭	井村文化事業社	100
4	インドネシア政変の嵐の前に (インドネシア)	左 藤 正 範	井村文化事業社	340
5	思い出のシンガポール——光と影と (シンガポール)	幸 節 みゆき	アジア出版	136
6	12のルビー：ビルマ女流作家選 (ビルマ)	土橋 泰子、南田 みどり 堀 田 桂 子	段々社	156
7	東南アジア音楽の思想 (フィリピン)	高 橋 悠 治	新宿書房	110
8	シンガポール華文小説選 下 (シンガポール)	福 永 平 和 陳 俊 勲	井村文化事業社	130
9	その名はカーン (タイ)	岩 城 雄次郎	井村文化事業社	160



「翻訳出版促進助成」・東南アジア向け〔4件；2,477万円〕

No.	プロジェクト名	代表表者者	代表者所属	助成金額 (万円)
1	マレーシア向け・『隣人をよく知ろう』翻訳出版共同プロジェクト (継-3)	アブ・バカール H.	学術振興財団	1,451
2	ネパール向け・『隣人をよく知ろう』翻訳出版共同プロジェクト (継-3)	M.L. カルマチャルヤ	日本文学翻訳委員会	665
3	スリランカ向け・『隣人をよく知ろう』翻訳出版共同プロジェクト (継-2)	D.A. ラジャカルナ	日本文学翻訳委員会	70
4	日本の産業、経済、経営に関する本のヴェトナム語への翻訳と出版 (継-2)	V.D. ルオック	世界経済研究所	291

「翻訳出版促進助成」・東南アジア相互間〔4件；1,555万円〕

1	ブラヤー・アヌマーン・ラーチャトンによる民俗学関係著書のネパール諸語への翻訳と出版(継-2)	S.L. シュレスト	チュワサ・バサ	205
2	東南アジア相互間『隣人をよく知ろう』翻訳出版共同プロジェクト — フィリピン — (継-2)	F.S. ホセ	ソリダリティ財団	1,045
3	インドネシア語—ヴェトナム語辞典の編纂	P.D. ズオン	東南アジア研究所	81
4	タイ語—ヴェトナム語辞書編纂(継-2)	P.D. ズオン	東南アジア研究所	224

東南アジア諸語辞書編纂出版助成〔2件；1,200万円〕

1	現代ベトナム語大辞典(継-3)	川本邦衛	慶応義塾大学言語文化研究所	500
2	タイ日辞典(継-2)	富田竹二郎	天理大学	700

1986年度『隣人をよく知ろう』プログラム合計

19件

6,604

注：プロジェクト名末尾の継-2(3)は、継続2(3)年目を示す。



新刊紹介

『身近な環境づくり—環境家計簿と環境カルテ—』 盛岡 通・著
日本評論社・刊
B 5 変形判 255頁 3,200円

「身近な環境」への関心が高まりつつあるが、「身近」であるが故に客観的・科学的な取扱いの難しさがある。著者らは、環境家計簿と環境カルテという2つの手法を軸にして、日本各地の市民運動、住民運動、自治体行政に協力してきたが、本書はそれらの事例を丹念に検討・整理し、理論的にも筋道を明らかにしようとしたものである。当財団による研究助成の成果の他、日本生命財団の助成成果も含まれている。

『米国初期の日本語新聞』

田村紀雄、白水繁彦・編著
勁草書房・刊
A 5 判 453頁 7,000円

日米の研究者からなる日系新聞研究会（代表：田村紀雄）は、1981年以来、当財団の研究助成を得て、精力的な研究活動を進めてきた。その第1回の研究発表討論会が1984年11月、東京経済大学にて開催され、第2回が翌年の9月にU.C.L.A.で開催された。第1回の発表論文をもとに再執筆・編集したのが本書である。

1886年から1924年に至る約40年間の、アメリカにおける日系ジャーナリズムの諸問題が11編の論文としてまとめられている。日米関係史に新しい視点からアプローチした力作である。

『巨大地震—予知とその影響—』

広瀬弘忠・編著
東京大学出版会・刊
四六判 212頁 2,200円

巨大地震が国家の手によって科学的に

予知された地域として、わが国の東海地域とアメリカの南カリフォルニア地域がある。本書は、これら両地域における地震予知の成立過程やその背景、予知に対する社会的対応や予知がもたらした社会的影響、さらに地域住民の心理的影響についても調査し、比較を行ったものである。地震予知という行為自体は極めて自然科学的な装いをもって行われるわけであるが、その受けとめ方は、地域社会やその文化的伝統によって大きく異なることが興味深い。1982～83年研究助成の成果である。

『科学研究のライフサイクル』

山田圭一、塚原圭一・編著
東京大学出版会・刊
A 5 判 205頁 3,800円

科学研究の新しい専門分野がどのように形成され、どのように衰退していくのかを実証的に明らかにすることは、今後の科学政策立案のためにも重要な課題である。本書は、長年にわたってこのテーマに関心をもちつづけてきた著者らが、主として「形成過程」に重点を置き、計量的なアプローチによって分析したものである。本書の一部は、当財団の研究助成による成果である。

『南タイ文化百科事典』

南タイ文化百科事典委員会・編
シーナカリンウィロート大学
ソククラ校南タイ研究所・刊

本事典は、1981～84年度の4年間にわたり、その編纂と出版に対して国際助成を受けたプロジェクトの成果である。全10巻からなり、南タイ地方に固有の習俗や文物、遺跡、生業、民芸、儀礼等を多

岐にわたって収録し、写真や図録を豊富に用いて解説している。使用言語はタイ語である。購入希望者は、同研究所でお申し込みを。（なお、お問い合わせはトヨタ財団・国際助成部門まで）

お知らせ

当財団では、昨年度の研究助成対象の第Ⅲ種（総合）研究に係わる研究報告会、および第3回研究コンクール・奨励賞チームによる最終研究報告会をそれぞれ下記の通り実施する予定です。ご関心おもちの方は、研究助成部門までお問い合わせを。（場所はいずれも東京都港区六本木国際文化会館講堂）

- ・研究助成（第Ⅲ種）報告会
11月7日（金）10:00～17:30
- ・第3回研究コンクール最終研究報告会
11月29日（土）10:00～17:30

Information

日本のインドネシア占領期に関する史料フォーラムでは、12月4～6日にアジア経済研究所にて史料展示会を開催。詳細は同研究所、井草（☎353-4231）まで。

編集後記

- ◆今回は、本年度の助成対象決定にともない、増版して“助成決定特集号”としましたが、ご覧いただいた感想はいかがなものでしょうか？
- ◆これで助成金の累計額は、50億円を突破！日本の大型財団の基金にも匹敵する額です。その成果はお金には換算できませんが、現在の、あるいは将来社会の礎になろうことを願ってやみません。
- ◆それにしても心苦しいのは、多くの申請者の方々のご希望に沿えなかったこと。予算枠の関係や高い倍率など理由はともかく、お役に立てず本当にゴメンナサイ。

トヨタ財団レポート No.38

このレポートを継続してご希望の方は、お葉書にて財団宛てお申し込みください。

発行日 1986年 10月28日
発行所 財団法人 トヨタ財団
発行人 山口日出夫
編集人 渡辺 元
印刷 真友工芸株式会社